

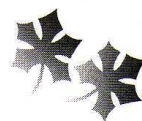


ヴァイオリン・レッスン・ルーム

巨匠の伝言

第44回

0と4の使い方
チャイコフスキー：スケルツォ



ヴァイオリニスト 木野 雅之
日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・コンサートマスター

URL : <http://www.netlaputa.ne.jp/~kinopizz/>

0と4の使い方

開放弦を上手く使えるか、使えないかは、経験から学ぶことが多い。そして、その使い方にはいろいろあり、音色を作る上でその人の個性を発揮でき楽しい。同じ音に4を使うかどうかというのも、多くの曲を弾いていると、どういうときに使えばいいのか等、自然に分かってくるものである。

一つの方法として、あるパッセージの中で和声を強調したいところでは、0を混ぜて、二重三重音を分散した形を作ればよい。また、そうすることによってシフトの多い曲にも、音楽的な要素を壊さずに対応でき、うまく弾くことができる。

ひとつ気を付けなければいけないのは、開放弦だけは、指を押さえるときと弦の圧力が変わるので、即座に対応できるよう、弓のコントロールをする必要がある。あるフレーズの中で音色を揃えるときには4の指を使って一つの弦で弾けるよう

にするのは大変効果的である。シフトが必要などときには4の指を十分伸ばし、常に音程がしっかりと取れるように繰り返し練習すること。同時に親指の位置にも注意。下がりすぎていると安定して音を取ることができず、また、音量そのものも弱くなってしまふであろう。左手全体の動きが重要であるのがポイントである。

最後に開放弦におけるヴィブラートの処理だが、オクターヴ上の音をかけながら、開放弦にかけるやり方は、大抵の人が知っているであろう。この時に、常にその前後の音にも気を配ること。バランスよくかけないと音にムラができ、美しくない。ハーモニクスするときと同様、音色を考えて、自分の出している音をよく聴くこと。上手に使えば開放弦はヴァイオリンの音、本来の魅力を十分に引き出せる素晴らしい効果をもたらしてくれる。

● ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

Pyty Il'ich Tchaikovsky (1840~1893) ロシア

スケルツォ Scherzo Op.42-2

1861年よりペテルスブルクのロシア音楽協会の音楽教室に学ぶ。また、後にはモスクワ音楽院での教鞭を執ったヨーロッパ各地での活躍により、名声を高めた。

作風は西ヨーロッパの伝統とロシア国民楽派的な作風との折衷で、数多くの作品を残した。

『スケルツォ』は、1878年に書かれた『なつかしい土地の思い出』の中の第2曲目である。軽快なリズムで始まるテーマと、美しい旋律の中間部とのコントラストが、素晴らしい調和を伴っている。